

サッカーにおける 名監督の資質と条件とは？

（奥寺康彦（横浜F.C.G.M）に中村義昭が聞く〜）

かつてドイツ・ブンデスリーガで日本人初のプロサッカー選手として活躍した奥寺康彦氏。氏がドイツでプレーする中で感じた、ドイツサッカーはどんなものだったのか？ 〈ネス・バイスバイラー、オットー・レーハーゲルといった名將達が目指したサッカーを当時の出来事を変えながら語ってくれた。

構成・島袋鉄也
Text By Tetsuya Shinabukuro

バイスバイラーとの出会いが 奥寺のサッカー人生を変えた

中村：ドイツに渡って最初に会った監督は？

奥寺：1FCケルンの監督をしていたヘネス・バイスバイラーでしたね。

中村：奥寺さんも活躍されていた日本代表の監督だった二宮寛氏の計らいで、77年にドイツのケルンで合宿をおこなっていますね。

奥寺：この合宿がドイツへ渡るきっかけとなりました。私を含め

た5人で2軍の練習に参加したのですが、それを見たバイスバイラーが私の左足と、スピードに何かを感じてくれたのでしよう、合宿が終わって帰国後にオフアーをもらい1FCケルンに入団することになりました。

中村：当時のポジションはウィングでしたか。

奥寺：ええ、ちょうどその頃、バイスバイラーは左サイドの選手を探していたようでした。

中村：サッカーに限らず、日本の

その頃のヨーロッパでは、日本人選手に対する評価は低かったのですから、それなのに私にオフアーを出したということは、バイスバイラーが自分のひらめきに対して、かなりの確信があったのでしよう。実際、その確信によって多くの名選手が彼の下から生まれできました。

中村：そういった選手はバイスバイラーのひらめきで獲得したというのでしょうか？

奥寺：ええ、もちろんスカウティングもしていたとは思いますが。

中村：では、バイスバイラーはどのようなにして、奥寺獲得を周囲に説得したのでしょうか？

奥寺：彼の実績が周囲を納得させたと言えます。彼がそれまでに獲得した選手たちが素晴らしい成績を残していたから、そこは誰も否定できなかったでしょう。

中村：バイスバイラーが確信を得て獲得してくれたのだから「監督に任せておけば大丈夫だ」という

安心感はありませんでしたか。

奥寺：確かに彼にはよくしてもらいました。それと同時に、鍛えてもらったということも言えます。私が試合に出場しはじめて3、4試合が過ぎてなかなか調子が上がらないと、練習中に監督に呼ばれて、「どうしたんだ？ もっと自分をかせ！ 相手に遠慮することはないのだから、もっと自分のプレーをしろ！」と言われたことがありました。

中村：奥寺さんが1FCケルンと契約したのは77年10月7日で、12日にはすでにベンチ入りしていました。

奥寺：試合には出なかったのですが、おそらくバイスバイラーが試合の雰囲気を感じさせるために計らってくれたのではないのでしょうか。中村：バイスバイラーはどんなサッカーを目指していましたか？奥寺：サイド攻撃が中心のサッカーですね。選手の個性を生かした、とても攻撃的なサッカーで、プ

レーンについてとても面白かったことをよく覚えています。

中村：ヘルタから移籍したブレームンではオットー・レーハーゲル監督が、「オクは他の選手の3倍働く」と話していたそうですね。

奥寺：いろいろなポジションをこなしていたので、監督からみれば、使い勝手が良い選手であったとは思っています。

中村：レーハーゲルの練習メニューはどういったものでしたか？

奥寺：私の在籍中は練習内容がほとんど変わらなくて、ゲーム形式の練習が大部分を占めていましたね。

中村：10数年ブレームンで指揮を執つて、その間、練習内容は変わらざ、ということですか？

奥寺：ええ、ほとんど変わらなかったのではないのでしょうか。その後、レーハーゲルは移籍先のバイエルンでも、そのゲーム形式重視の練習方法を取り入れていたと思いますね。ただ、結果的に半年で

退任していることから、バイエルンでは選手にその練習方法が馴染まなかったのでしょうか。

中村：レーハーゲルの考えるチーム作りのポイントとは？

奥寺：レーハーゲルは「まずチームにどんな選手がいるか把握すること」を重要視していました。そして、その選手の特長を生かすためにはどんな戦術がいいかを考えていました。なかには自分のスタイルに選手を当てはめて戦術を組み立てる監督もいます。ただ、それによって個々の選手が持つている能力が生かされなくなることも出てくる。

ですから、大事なことは選手の能力をいかに発揮させるかに尽きますね。その方法としてチーム戦術や監督のコミュニケーション能力が必要だということですね。

中村：監督としての資質の中に、選手への対応力もあると思いますか？

奥寺：ええ、監督は味方の選手が

相手を傷つける罵声や、監督自身に対する反抗的な口調については、厳しく注意する必要があります。ただ、その他はあまり神経質になることはないでしょう。

中村：奥寺さんが現役時代に戦った選手の中には、今では指導者として活躍されている方もいますが、選手から監督になつて、そのスタイルに変化は見られますか？

奥寺：基本的には変わりませんが、監督になつても、やはりその人の個性というものは出てきます。ただ、ドイツの監督は「ドイツスタイル」ということを前提に、自らの戦術を構築している気がします。ですから、いまバイエルンの試合を見ているとつくづく、「ああ、ドイツのサッカーだな」と感じますね。

中村：奥寺さんからみたドイツサッカーとは？

奥寺：一言で表すと、素早くサイドを崩すサッカーですね。具体的には、細かく繋ぐより、ロングパスを多用し、ディフェンスにおいては

1対1に強いというサッカーです。中村..それは奥寺さんがプレーされていたとき、現在でも変わらないうですか？

奥寺..最近のドイツのディフェンダーはちよつと物足りない気はしています。

中村..カパーリングや危機察知能力でその強さを補っていますね。

選手に信頼してもらうには結果が大事だということですね。

奥寺..若さゆえに仕方ないことではあります。ディフェンスは経験が非常に大事なポジションですから。ただ、いまのドイツのディフェンダーは1対1というケースをあまり経験してこなかったように見えますね。

選手にやる気を出させるには

自身も試合に出場していたわけですから。それは、選手も監督も仕事とプライベートをきつちりわけているからできることなわけです。バイスバイラーの場合はゲームが終わると、ほとんど選手とは話さずに帰っていましたから。中村..では監督とプライベートで出かけたりすることはなかったわけですか？

奥寺..ほとんどないですね、選手同士では食事に出かけることはありましたけど。中村..選手の相談に乗ってあげるのもいい監督の条件かなとも思っています。奥寺..最近では若い監督も増えてきたから、そういうケースもあるよ

中村..ところで奥寺さんの考える良い監督の資質とは。

奥寺..まず、こういうサッカーがしたいという信念をもっていること。次に、自分の目指すビジョンを選手に確実に伝えること。選手の特長を生かして戦術を組み立てるスタイルもありますが、まずは、

自分の描くサッカーを選手に理解してもらうことが大切です。私の経験からもそれはとても重要なことです。監督の持つているビジョンが選手に伝わらないという結果は生まれてきませんからね。

中村..選手に自分の意思を伝える、という点においてバイスバイラーやレナールゲルはどうでしたか？

うです。また、選手がよりビジネスライクになつてきているので、「コミュニケーションのとり方も時代とも変わってきているのかもしれないですね。

中村..日本の監督については？
奥寺..岡田監督を例に挙げると、彼は経験も豊富ですし、信念も持っている。自分の意図するこ

とを明確に示すし、選手にもそれを伝えていく。また、他にもそういった監督は出てきていると思えます。やはり大事なことは、技術云々より、監督のビジョンを選手に伝えきることができるとかどうかにあります。中村..若手の監督でこれから期待できる人材もいると思えますが、

奥寺..彼らの伝え方はとてもシンプル。細かいことは言わずに、「私はこういうサッカーがしたいから君たちはこうしてくれ」といった具合でした。そこで、ある時、レナールゲルに聞いてみたんです。「どうしたらチームは勝てるのか」とすると「選手に勝ちたいという気持ちがあればそれでいいんだ」と



Football LIFE
中村善昭 (なかむらよしあき)

1966年10月7日生まれ。サッカーアナウンサー。ラジオバーンナリティー / DJ。チャンピオンズリーグ、セリエA、プレミアリーグ、ブンデスリーガから、W杯予選、ほか代表マッチ、スペインリーグなど、年間200試合以上を実況中。

答えてくれました。中村..では名監督の条件をひとつ挙げると何でしょうか？

奥寺..選手にやる気を出させることですね。それはいかにして選手からの信頼を得るかに繋がってきます。そういう点ではヒディングは非常に上手ですね。彼がチームに就任すると、最初はフィジカ

奥寺..確かにいい人材はいるけれど、日本にはチーム数が少ないので、彼らが経験を積むだけの土壌がないのが現状です。海外の場合は、若手監督がキャリアを積むためのアマチュアチームが多いから、そこで多くの経験を重ねることが出来ます。残念ですが、いまの日本にはそのチャンスが決定的に少

ないのです。J2の監督を経験して、そこで採まれてJ1に昇格するといったケースはありますが、海外に比べると、まだまだチーム数が少ないので、若手監督にとってチャンスが多いとは言えません。ただ、今後はたくさんクラブがJリーグ加入へ名乗りを上げると思えます。そうすると、そのクラブ



Football LIFE
奥寺康彦 (おくでらやすひこ)
1952年3月12日生まれ。秋田県出身。1977年、「JFCケルン」から日本人初のプロサッカー選手としてデビュー。引退後、横浜FC設立当初よりゼネラルマネージャーを経て、2000年11月代表取締役ゼネラルマネージャーに就任。

中村..ジウコの次の代表監督として、ドイツ出身の厳格な監督もいかなと思えます。奥寺..面白いと思えますよ。日本が速さを生かしたプレススタイルを目指すのなら、やはりヨーロッパの監督がいいですね。その点で、日本のサッカーを熟知しているヴェンゲルも面白いと思えますよ。